

入学前指導で知的好奇心を呼び起こす試み —「正解を覚える学び」から「自分で考え組み立てる学び」への 意識の転換を目指して

The trial for senior high school students to find out creative thinking is interesting, before start of student life in the university
—The change of the way of students to study from only memorizing given correct answers to thinking and creating their own reports

津吹 卓

Takashi TSUBUKI

要 旨

多くの新入生は、大学における本来の学びである「自ら学び考え組み立て主張する」ことを知らず、入学後に大学の授業への抵抗感がある。その理由は、中学・高等学校でこのようなことを学ぶチャンスが多くないからである。これは学生にとっても教員にとっても不幸なことである。

そこで児童教育学科では、AO入試や推薦入試で合格が内定し、いわゆる受験勉強をしなくても済む高校生に12～3月に入学前指導として、教育関係で興味のあるテーマを自由に考え、レポートを作成させた。自分でレポートを組み立てた経験がほとんどないので、考え方・組み立て方・書き方を指導した。提出されたレポートやアンケートを見ると、自己評価はそれほど高くなく、その理由はレポートの書き方を知らない・文章力が無いからと答えていた。しかし、多くの生徒はこの課題を肯定的にとらえ真面目に取り組んでおり、自分なりの意見や発想を述べた良いレポートも多かった。

この論文ではこの課題の具体的な展開・レポートの状態・学生の思いを具体的に述べ、この課題の意義や改善点を考察した。

はじめに

児童教育学科では2014年度のAO入試・推薦入試の合格内定者全員に対して、入学前指導の一

環として「教育関係の自由レポート」の作成を課した。テーマは、自分が興味のある内容、本は数冊使用すること、それ以外は全く自由とした。書き方のアドバイスを行ない、内定者が書きやすい

ように考慮した。この展開と、受験生がどのようにとらえたのかについて報告する。この試みが一つの参考例になれば幸いである。

この主旨は、高校と大学の学びを生徒にとって極力スムーズに移行するとともに、大学における学びの魅力を内定者に、入学前に感じてほしかったからである。高校での学びと大学での学びは、学生にとって根本的に異なる。1年生を対象に大学での学び方を伝える「入門ゼミ」で、前期がある程度過ぎたころにいろいろな授業の様子を聞いてみると、語学や体育の授業は取っ付きやすいが、いわゆる大学らしい授業はよく分からないと言う。前者は授業のねらいが高校と同様であるため分かり易く、決まったことを（覚えて）できるようにすればよい。ところが大学的な授業では、いろいろな話題を出しながら担当者が話をし、また学生の意見を求めて、内容を組み立てていく。考え方や思考が中心となり、何が正しい答であり、何を知識として覚えておけば良いのかがはっきり示されないと感じるからであろう。本来学びとはこのようなものであるのだが、多くの新入生は小学校、中学校、高等学校と進んでく中で、「正解を記憶し、それを試験で答案に書くのが勉強である」と錯覚したままで大学へ来てしまうのである。

このことは、藤原（2002a）が1970年代から90年代にかけて中学生の学習方法がどのように変化し、本来の学習がどうして崩れていったのかを調査に基づき報告している。そして、本来の学びを知らない中高生に対して、本来の学習の仕方を提示・助言している（藤原，2002b）。

もちろん小中高で、本来の学びを伝えている先生もいらっしゃる。しかしその数はとても少ない。教える量に対して授業時間が少なすぎるため、生徒たちが考えて理解し納得するところまでできず、どうしても結論を教えそれを覚えさせるといふ授業が現実には多くなっている。そして試験でも、知識を確認する問題が多い。

目先の結果ばかりを重視する今の世の中の風

潮、試験の偏差値と順位ばかり気にする多くの保護者、大学受験の結果を意識せざるを得ない高校側、このような中で本来の学びを全く知らない生徒も多いのである。これは新入生にとっても大学にとっても、極めて不幸なことである。筆者は同じ学園の中学・高等学校に1977年から35年勤務した後、大学へ異動した。その間教育現場で、藤原（2002a）の述べた生徒の学習方法の変容を同様に肌で感じており、教育実践の中で本来の学びを求めて現在まで総合的に試みてきた（津吹，1991；1992；1994；1999；2000；2008；2009a；2009b；2010；2012；2013；2014；津吹卓・五十川麻子・奥山幸，2002他）。

筆者は十文字高校で高3学年主任であった1998年に中心になって、合格内定者全員に対して「卒業研究」と称して進学する学科と関係する興味のある内容を中心とした、大きなレポートをおよそ3か月かけて作成させた（津吹，2000）。それ以来、この卒業研究は高3の学年ではほぼ毎年踏襲されている。それはなぜか。合格内定を取り、受験勉強をしないですむ2学期後半から3学期を、生徒が有意義に過ごす方法だからである。普段生徒に出される課題は、基本的に何をどうするのか細かい指示があり、それに従って生徒は取り組む。いや、敢えて言うと取り組まされるのである。ところがこの「卒業研究」は取り組むことは決まっているが、テーマは自分で自由に決めて良く（一般的には進学する学科に関係し自分が興味のある内容が多い）、生徒にとってより良い展開のためのアドバイスが、テーマに相応しい教科担当者からマンツーマンで行なわれる。そのため生徒にとっての自由度は高く、多くの生徒がやって良かった、充実してできた、知りたいことを調べることができて楽しかった、との自己評価をしていたのであった（田辺，2006；津吹，2009；2010）。

筆者は上記の体験を通して、今の世の中の中高の状況をよく理解していると考えている。その立場での提言である。

なお、AO入試・推薦入試においては、時間の流れにともない合格内定者、合格者、学生と名称が変化するので、これ以降は「学生」と表記する。

1. 入学前指導では何をすべきか

入学する前に高校生にしておいてほしいことは、大学に入学後に学びながら伸びていくために必要なことを身に付けておくことである。それは大きく2つに分けられる。

第1は、基本的な知識の習得と理解である。それは入学生に共通することと、学科に特有なことがある。本学では、リメディアル教育センターが中心となって、数学と国語の基礎力の確認・習得を、入学者全員に指導している。一方、児童教育学科としては、ピアノ・水泳と鉄棒・社会の基礎知識の習得を課している。

第2は、前述した本来の学びの体験である。入学前に少しでもこの発想を知っていれば入学後の学習がスムーズになり、学ぶ喜びにつながる。しかしこれは教え込むことができないために、実際にはなかなか難しい。しかしこの種の学びは前述の通り、一旦取り組み始めると、学生は自ら学ぶのである。

2. 児童教育学科での展開

上記の体験を基に、2014年度のAO入試・推薦入試合格者全員に対して、同様の考え方で入学前指導としてレポートを課し（資料1）、関係教員の学内のメールアドレスを伝え学生の質問に対応した。

実は2012年度は指定図書6冊から1、2冊を選び、「本の内容」と「自分の考えたこと」などについてのレポート作成を、2013年度は今年度と同じ趣旨でプリントを配布し、レポート作成のアドバイスをする日を1日設定し、希望者に大学へ来てもらった。参加者は結構いたものの、質問は出なかった。結局2年ともこちらの本当のねらいは学生にはうまく届かず、真面目に取り組む意味は

あったものの、“普通の”レポートが提出されて終わってしまった。

この反省を基に、2014年度はレポートの取り組み方をより具体的に伝えることを考えた。すなわち、入学前指導のプリントに加え、レポートの組み立て方を考えるための「レポートの設計図」（資料2）、さらにレポートの書き方（資料3）を同封して送付した。この論文では、資料2の状況が分かるように、本人の了承を得て2名の学生が実際に提出した手書きのプリントを、例として示した。

なお、入試の種類により内定者決定の時期や人数が異なるため、敢えてこの違いを活用して学生にどこまでの指導が必要なのかを探ろうと、異なる次の3種類の方法で指導した。

- a. 個人指導（AO入試I期の内定者）：前もって書いた「レポートの設計図」を持ってこさせ、全員にレポート作成の意味を伝えた後、マンツーマンで何を考えどのようなことを知りたいのか、どう展開したいのかを聞いてアドバイスをした。また、筆者が高校で数年前に行なった高3の生徒が書いた実物のレポートから教育関係のもの20部あまりを拝借し、見本として見せた。
- b. 全体指導（AO II期と推薦I期の内定者）：aと同様だが、人数の関係でマンツーマンの指導は省いた。
- c. プリント送付（推薦II期の内定者）：時期の関係で、入学前指導と「レポートの書き方・設計図」のプリントを送付しただけであった。

3. 内容別テーマのまとめ

学生の書いたレポートのテーマは次のようであった。

(1) 大枠と人数

大きくグループに分けると、次のようになった。

教育関係8名；教員関係3名；子ども関係10名；保護者関係5名；教科内容関係3名；特別支援教育4名；絵本・読書関係4名；いじめ関係8名

(2) 個々のテーマ

次に学生の選んだ個々のレポートのテーマを項目別に列挙する。

- ①教育関係8名：子どものやる気の引き出し方；教師の会話術と子どもを勇気づける教師像について；子育てについて；ストーリーで学ぶ道徳心；学ぶとは何か；教えるということ；教育力について；イベント式授業
- ②教員関係3名：教師について；小学校教師になるために必要なこと；小学校教諭に関する考察
- ③子ども関係10名：小学生の放課後生活；児童の心理；子どもの個性について；問題点をふまえて児童が過ごしやすい環境にするために・・・；子どものやる気と才能；子どもとストレス；子どもの反抗期について；子どもと運動能力の変化；動物と子ども；子どもの味覚
- ④保護者関係5名：子どもは親の背を見て育つ；モンスターペアレントと教師；モンスターペアレント!?；児童虐待；虐待について
- ⑤教科内容関係3名：現在の日韓関係について；戦争への道；児童英語教育
- ⑥特別支援教育4名：発達障害と特別支援教育；LD（学習障害）について；障害について；障害者と社会
- ⑦絵本・読書関係4名：児童の読書について；兎の眼・太陽の子を読んで私を感じたこと；絵本を通して学ぶこと；絵本「ぐりとぐら」はなぜ長い間愛されているのか
- ⑧いじめ関係8名：いじめへの対策と現状；現代の「いじめ」の特徴と学校の取り組み方；子どもの心といじめ；いじめから学ぶこと；ネット社会におけるいじめ；子どものいじめについて；いじめ問題；いじめ

なお、入学後の入門ゼミの授業において、自由に選んだ本を読み内容の要約、選択した新聞記事の要約、そしてそれらの発表やお互いのコ

メントを述べる中でも、このレポートと関連することが多く出てきた。結果的に、学生にとっては大学の授業の予習にもなったのである。

4. レポート・アンケートに見る課題に対する学生の思い（と考察）

入門ゼミの初日にレポートが提出された。学生の思いを更にはっきり知るために、レポートに関するアンケート調査（資料4）も行った。これらを基に、a. 個人指導、b. 全体指導、c. プリント送付、の指導法の違いで、学生のレポートに対する思いやとらえ方に差があったのか分析してみたい。初めに記述内容を述べ、さらに項目別に段階で比較した。

(1) レポート作成に対する思い（複数回答）

レポートには、このテーマにした理由、書き終わってどのように感じたのか等の、内容や取り組みに対する思いも自由に書かせた。そこから学生の気持を抜き出して項目別にまとめてみた。レポートの書き方・文章力に関する記述が多かったので、分かり易いように太字の斜字体で示した。

1) 個人指導のグループ（14名）※全体指導・レポートの見本提示を含む

- ①+の自己評価の記述有り 8名（57.1%）
 - ・大変だったけれどやりがいがあった
 - ・とても頑張って取り組んだ
 - ・改めて自分の思いに気づけてこともあり、やって良かった
 - ・初めは全然わからなかったが、始めて見ると調べるのも楽しく、パソコンでのレポート作成も意外と楽しかった
 - ・楽しかった
 - ・自分の調べたいテーマを調べられたので良かった
 - ・世の中の今の状態を示した上で自分の意見を書けて良かった
 - ・この体験はすごく良かった

- ・戦争のことを少しでも知ってもらおうと思ひ、自分なりに分かり易くまとめられた

②-の自己評価の記述有り 13名 (93.9%)

レポートの書き方が分からない 6名

- ・初めてのことでレポートの取り組み方(書き方・言葉・内容・まとめ方)があまりよく分からなかった
- ・書き方が分からずうまくまとめられなかった
- ・やっていくうちに何を書いたら良いのか分からなくなり、自分の考えも分からなくなった

文章力が無い 6名

- ・文章力が無い 3名
- ・やってみて自分の意見をまとめること、内容に沿ってやっていくこと、の難しさを知った
- ・入学前からパソコンを使うのは辛かった(手書きも可の指示は出したが)
- ・文字が大きすぎた;文字だけで写真なし
- ・仕上がりが遅かった;始めるのが遅かった

③課題に対して

大切・必要

- ・自分自身で決めてやることは今後自分にとって大切だと思った 2名
- ・テーマを与えられなかったので何を書いたらいいのか分からず少し戸惑ったが、これから社会に出るためには大切なことだと思った 2名

指示がほしい

- ・テーマを決めてほしかった

2) 全体指導のグループ(18名) ※レポートの見本提示を含む

①+の自己評価の記述有り 7名 (33.3%)

- ・レポートに意欲的に取り組めた
- ・知らなかったことを自分で調べ組み立てることができ、私は面白かった
- ・初めは難しいと思ったが、取り組むうちに自分にとって意味があり興味があることも

あって、夢中になって作成した

- ・全部自分で決めると、きちんと自分で考えて書くことができるので良いと思う
- ・言葉はおかしかったかもしれないが、自分の書きたいことをまとめられた
- ・難しかったができあがった時はうれしかった
- ・入学前にこのようなレポートを書き、今後に生かせる

②-の自己評価の記述有り 15名 (71.4%)

レポートの書き方が分からない 12名

- ・初めてで(難しすぎて)レポートの書き方が分からなかった
- ・書き方が分からずただ写しただけになった
- ・レポートの組み立て方が(難しく)分からなかった;例がほしい;私はレポートが苦手

文章力が無い 3名

- ・文章がうまくまとめられなかった 3名
- ・内容を深いところまで書けなかった

③課題に対して

意味があり必要

- ・教育についてこれから学ぶという意識は高まった
- ・本当に調べたいことでないと進まないと思った
- ・自分で決めて自分の興味のある内容について詳しく調べる課題はとても良く、詳しく調べることによりまた別のことに興味を持つことができると思う
- ・自分の考えを書くことはとても大切だと思うので、このような機会があって良かった
- ・難しくこれで良いのか不安になったが、自分の意見を述べ考えていることをまとめるレポートは必要だと思う

文章力がつく

- ・このような課題に取り組むことで文章を読み取りまとめる力が付くと思う
- ・普段自分が考えたりまとめたりしない内容を考えたのは大変だったが、こういうこと

を通して文章をうまくまとめられるようになるのかと思った

慣れないので大変

- ・大学ではすべて自分で決めなければならない慣れるまでとても大変
- ・自分がどのようなテーマに関心があるのかを探るのが先ず大変だった

高校の先生

- ・先生に見てもらった；力を借りた 2名

3) プリント送付のグループ (11名) ※口頭での説明・レポート見本なし

①+の自己評価の記述有り 6名 (54.5%)

- ・自分の経験も交えて書くことができ、レポートで自分の考えを伝えることができた
- ・大変そうだったと思ったが、作成しているうちにテーマなどを自分ですべて決めた方がより自分の思ったことが伝わるようにレポートをかけるので意欲的になり、私はすごく良いと思った
- ・自分の体験や本を読んで感じたことを書くことができたと思う
- ・自分の意見がたくさんかけた
- ・大学とはこのようなものかと、入学前に実感できる課題だった
- ・初めてレポートを書いたので楽しい部分もあった

②-の自己評価の記述有り 8名 (72.7%)

レポートの書き方が分からない 5名

- ・レポート作りは初めてで、文章の組み立てや見易さの工夫はとても難しかった
- ・高校ではレポートを書く機会が少なかったので書き方を詳しく知りたい
- ・書き方がよく分からず、例えのレポート等をももらえればイメージが湧き書きやすかった
- ・もっと一つひとつに注目して詳しく説明できれば良かった
- ・書き方が理解できておらず、考察もできていなかった

文章力が無い 3名

- ・文章力の無さを実感した

③課題に対して

難しい

- ・テーマ決めや組み立てを考えることが難しかった
- ・このようなことはできればやりたくないの
で、取り掛かるまでに時間がかかった

(2) レポート作成に対する自己評価

アンケート調査の結果を基に、レポートの取り組み・レポート自体に対する自己評価・および課題のとらえ方について見てみたい。この評価はA・B・C・Dの4段階で付けさせた。基準はあくまで学生の主観である。

1) レポートの取り組みに対する自己評価(表1)

表1にあるように、全体で見ると、43名中AとBの合計が24名、CとDの合計が19名となり、自分の取り組みに肯定的な評価の学生の方が、否定的な評価の学生よりも多い。

3グループともにAの評価は数名、Dは1名いるかどうかである。3グループの合計ではBとCがほぼ同数であるが、グループ別にBとCを比較すると、個人指導グループ(以下「個人指導」)では同数、全体指導グループ(以下「全体指導」)ではCがBの倍で、プリント送付グループ(以下「プリント送付」)ではCに対してBが極端に多かった。

表1. レポートの取り組みに対する自己評価と人数(名)

	A	B	C	D	計
個人指導	3	5	5	1	14
全体指導	2	5	10	1	18
プリント送付	1	8	2	0	11
計	6	18	17	2	43

2) 出来上がったレポートに対する自己評価(表2)

全グループの合計で見ると、AとDはそれぞれ3名、Bは15名、Cは22名となる。B

とCの差は「個人指導」の差による。AとBの合計は18名、CとDの合計は25名となり、レポートに対する自己評価は決して高くない。3グループともにA・Dは0～2人で、BとCを比較すると「個人指導」はBが4人に対してCは倍の8人いる。一方、「全体指導」・「プリント送付」ではBとCに大きな差はない。

表2. 出来上がったレポートに対する自己評価と人数(名)

	A	B	C	D	計
個人指導	1	4	8	1	14
全体指導	2	6	8	2	18
プリント送付	0	5	6	0	11
計	3	15	22	3	43

3) 指導の違いに基づくレポート作成に対する自己評価の違い(複数回答)(表3)

レポート作成に対する自己評価を+とした学生と、-とした学生を比較してみたい。+の自己評価をした人数は43人中21人(21/43以下同じ)であった。グループ別にみると、「個人指導」では8/14、「全体指導」では7/18、「プリント送付」では6/11であった。一方-の自己評価は36/43であり、グループ別で同じ順に示すと13/14、15/18、8/11となった。-の自己評価にした理由を複数回答で見ると、レポートの書き方が分からないからという学生が23/43、同様のグループ順で6/14、12/18、5/11、そして文章力が無いからとい

う学生が12/43、同様の順で6/14、3/18、3/11となった。すなわち延べ35名の学生が、自分はレポートの書き方を知らないでこのレポートで良いのだろうかとか、自分には文章力が無いので良いレポートが書けない、という理由で自分のレポートに-の評価をしていたのである。

4) 今回のレポートの課題のとらえ方(表4)

今回の課題を学生はどのようにとらえたのか尋ねた。(1)で述べたようにレポートには個々のことについてはいろいろな記述があった。しかしアンケート調査では、肯定的にとらえたものは43人中36人(36/43以下同様)であり、課題の主旨は極めて多くの学生に伝わったと考えられる。3グループで比較すると、個人指導・全体指導のグループはとくに多く、それぞれの人数は12/14、16/18となった。プリント送付のグループは8/11で割合は下がるがそれでも7割を越えていた。最後のグループには直接語りかけることができなかったので、可能性としてその影響があったことも考えられた。

肯定的なとらえ方の主な理由は、自分が書けたかどうかは別にして、大学で学ぶためには必要であり良い体験ができたというもの、自分自身がレポートに集中して書きたいことが書けたなど充実感を感じたというものであった。

表3. 指導の違いに基づくレポート作成に対するの自己評価の内容の違い(複数回答)

	プラスの自己評価を含む	マイナスの自己評価を含む		人数計
		レポートの書き方を知らず	文章力の無さ	
個人指導	8名	6名	3名	14名
全体指導	7名	12名	3名	18名
プリント送付	6名	5名	3名	11名
	21	23	9	

表4. 学生のこの課題のとらえ方と人数(名)

とらえ方	肯定的	否定的
個人指導	12	2
全体指導	16	2
プリント送付	8	3

5. 教員から見たレポート

ここでは教員の立場でレポートを見て、気づいたことを述べたい。

(1) レポートの構想の組み立て(表5)

レポート作成には当然のこととして、書くべき内容や個々の項目を考えるとともに、どの順番に並べると話の流れができ、主張が読み手に分かり易く伝わるかを考える必要がある。しかし高校ではなかなかそこまで指導ができていない。今回は作成の導入として「レポートの設計図」(資料2-1, 2)および「レポートの書き方」(資料3)というプリントを渡し、それに基づいて書くように指導した。そして学生の構想を知るために、レポートとともに提出させた。

表5で分かるように、43名中36名がレポートの全体の流れや構想をひとまずは考えている。普段はいきなり書きだす学生が多いのだが、今回はプリントのアドバイスに従い、ある程度考えた結果が目次になっている。この体験は重要である。とくに「全体指導」の全員、そして「プリント配布」の多くの学生が実行していることが分かる。前述の通り、「個人指導」では作ってきた設計図に基づいて話を聞き、学生が書きたいことを確認して流れを作るアドバイスした。したがって「個人指導」は全員ができていて良いはずなのだが、まだよく理解できなかったのであろうか。

表5. レポートの組み立て(構想)プリントの有無の人数(名)

組み立て	あり	無し
個人指導	9	5
全体指導	18	0
プリント送付	9	2

(2) 教員から見たレポートの評価(表6)

学生による自己評価は前述の通りで、3グループの合計はA:3人、B:15人、C:22人、D:3人であった。しかし筆者から見ると表4のように、3グループの合計はA:20人、B:18人、C:8人となった。とくに「全体指導」では21人中13人がAとなった。すなわち、学生と思いと異なり、良いレポートを書いている学生は多いのである。グループによる違いは、指導の違いよりもむしろ学生の実力の違いによるものではないかと思われた。AO入試の受験者には適性はあるのだが、学習力が不足している学生が多い。その影響による結果ではないかと考えられた。

表6. 教員によるレポートの評価と人数(名)

評価	A	B	C
個人指導	2	10	2
全体指導	13	5	3
プリント送付	5	3	3

6. レポートのページ数(表7)

学生はどの程度の量のレポートを書いたのだろうか。提出されたレポートの活字の大きさは同じではなく、また手書きのものもあった。そこでA4用紙におおよそ12ポイントほどで書いたものとしてページ数を算出してみた。その結果が表7である。全グループで表紙を除き、1~14ページであった。その中で、最も人数の多かったのが4ページの14人、次に2、5、9ページがそれぞれ6人、さらに3ページが5人、6ページが3人と続いた。ページ数だけの問題ではなく、自分のことばでしっかり書き、絵や図も手書きできちんと描いた者も多く、経験がないためにうまくまとめられていなくても一生懸命に取り組んだことがよく分かるレポートが多かった。

なお、最近の学生は何ページ書けばよいのかを非常に気にする。これは今までの教育の中ではページ数の規定がしっかりあって、それに満たな

表7. ページ数と人数 (人)

ページ数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
個人指導	1	2	3	4	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0
全体指導	0	3	2	4	4	1	1	0	5	0	0	0	0	1
プリント送付	0	1	0	6	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0
計	1	6	5	14	6	3	1	1	6	0	1	0	0	1

いと受け取ってもらえないという負の教育効果なのである。本来ある程度内容のあるものを書くには、ある程度のページ数が必要なのであるが、学生の意識の中では内容よりも形式が優先されているのである。

そのためにレポート作成のプリントにも、「ページを無理に埋めるのではなく自分の考えをしっかりと書くこと」と記載し、学生への説明の場でも再確認をした。形から内容への意識の移行が、今回学生の中である程度行なわれたように思われる。

7. 今後の展開の工夫ーレポートに見られる学生の気質を基にして

授業で教えていて強く感じるのであるが、最近の学生は「正しい答」ばかり意識しており、間違ふことを極端に嫌う。理科の実験でも、予定通りの結果が出ないと失敗と考えて結果を破棄し、正しい結果のみを覚えようとする。大学に入るまでにこのように育ってしまっているのである(津吹, 2013; 2014)。だから、「正しい書き方」を学び、その通りに書かないと「正しい良いレポート」ではないと考えている。内容よりも書き方にこだわっているのである。正しい書き方に基づき、文章力があって初めて、正しいレポートが書けると思っている。その点に自信が持てないために、自分なりに一生懸命頑張っ書いてきたにもかかわらず、自分のレポートに対する評価が低いのであろう。これはとても残念なことである。この「正解による呪縛」を解くために、レポートの書き方について次年度はさらに次の文章を加えようと考えている。

「ここで皆さんに要求しているのは、レポートの書き方や文章力ではありません。また単なる

ページ数ではありません。皆さんが書きたくて自由に書いたレポートは全て正解なのです。本気で向き合い自分らしさを発揮したレポートであれば、それで十分なのです。」

2年の学生は理科の授業を通して、気づいた謎や疑問を自分で考え分り納得する喜び、自分の考えを述べる喜び、疑問を解くために仲間と議論する喜びを体験したと述べている(津吹, 2013; 2014)。入学前に学生が書いたレポートの自己評価やアンケートでも、同様なことをも感じたと報告している。すなわち、このレポート作成が入学後の授業での学びの伏線になると考えられるのである。

おわりに

現状の高校と大学では、学生の意識や教育の質に大きなギャップが存在する。ここでは児童教育学科としての高校生から大学生への橋渡しと考える一つの展開例を示した。高校の先生方にも理解していただければ、教育における緩やかな高大連携につながるのではないだろうか。高校と大学のつなぎはとても大事なことである。そのための入学前指導の方法として、学科によってより適したほかの展開も十分に考えられる。多くの学生が大学で自分らしく学ぶ喜びを感じながら成長することを強く望みたい。児童教育学科の学生も、自立に向かって自分を育て、教員になるとともに良き社会人となること心から願うものである。

謝 辞

今回の展開では2013年度まで児童教育学科の専任で現在非常勤講師の廣坂多美子先生には合格内定者を筆者とともに指導していただき、大変お世

話になった。児童教育学科の先生方にはこの提案を受け入れ、サポートしていただいた。また、十文字中学・高等学校の橋本ヒロ子校長には、筆者が中高在籍当時に学年主任の立場で行ない保管してあった2008年度の卒業研究レポートから児童教育学科の見本として相応しいものを20編あまりお借りした。以上の方々に厚くお礼申し上げる。

文 献

- 藤澤伸介, 2002a. ごまかし勉強(上) 学力低下を助長するシステム. 169pp. 新曜社.
- 藤澤伸介, 2002b. ごまかし勉強(下) 本物の学力を求めて. 187pp. 新曜社.
- 田辺剛城, 2006. 高校3年生「卒業研究」の指導. 十文字中学・高等学校紀要28: 42-51.
- 津吹卓, 1991. 生物の授業の中で日本語の能力を高める試み——学習に対する生徒の発想の転換を——十文字中学・高等学校紀要13: 74-92.
- 津吹卓, 1992. 生物の授業の中で日本語の能力を高める試み——その後. 十文字中学・高等学校紀要14: 121-133.
- 津吹卓, 1994. 中学1年で生物(植物)分野をいかに教えるか——中高6年一貫教育を目指して——十文字中学・高等学校紀要16: 1-26.
- 津吹卓, 1999. 自分を分かり伸ばすことを目指した高校1~3の進路指導の試み. 十文字中学・高等学校紀要21: 1-106.
- 津吹卓, 2000. 受験に「生物」を使わない高3の生徒に生物の授業で何をどう教えるか——彼女たちの意欲を引き出すにはどうすればよいのか. 十文字中学・高等学校紀要22: 48-82.
- 津吹卓, 2008. 授業では何をすべきなのだろうか——「高1の生物の授業に対する自己評価と授業評価」を基にして. 十文字中学・高等学校紀要28: 80-98.
- 津吹卓, 2009a. 高等学校におけるNIEをどうとらえるのか. 十文字中学・高等学校紀要31: 38-47.
- 津吹卓, 2009b. 平成20年度高3卒業研究指導の考え方と展開. 十文字中学・高等学校紀要31: 22-37.
- 津吹卓, 2010. 高3卒業研究の指導と展開——今後の発展を目指して——. 十文字中学・高等学校紀要32: 33-48.
- 津吹卓, 2012. 中3理科2分野の新聞記事も活用した環境関係のレポート作成指導. 十文字中学・高等学校紀要34: 25-55.
- 津吹卓, 2013. 理科の苦手な児童教育学科の学生が「理科」の授業を通して何を学び何に目覚めたのか. 十文字学園女子大学人間生活学部紀要11: 229-241.
- 津吹卓, 2014. 童心に戻って白紙で実感する理科観察・実験—理科を“苦手”と思っている学生をいかに目覚めさせるのか. 初等理科教育48(2): 88-89.
- 津吹卓・五十川麻子・奥山幸, 2002. NIEから授業論へ——「激動する生命科学の現状」を新聞を使って授業の中で伝える中で学んだこと. 第1回全国高等学校NIE研究会研究発表全国大会プログラム・発表要旨集: 60-63.

《追記》

筆者は2014年度の4年生に対して、卒業研究指導を3年生から行なってきた。卒業研究論文作成指導は初めてであった。論文を書くためのデータは各自が十分に持っている状況であった。

ところが、論文作成の最後の場面で、学生の重大な問題点が判明した。全体を見渡せないために組み立てができない、すなわち目次を作れないのである。全体の中で何をどのように論じていけばよいのかを考えることが育っていない、いや経験する場面がなかなか無かったのである。止むを得ず、集中的に個人指導をして考えさせ、分からせつつ作成させるしかなかった。理解してしまえばできるのであるが。これは、いわゆる学力とは無関係であり、社会人になって伸びていく上で、大きな問題である。

今回の入学前指導のレポート課題では、そこまで考えていなかったのであるが。この様なチャンスを増やし、考えて組み立てることを体験させないと論文にならないのである。すべてを自ら考えて作るレポート作成の大切さを、改めて認識した次第である。

資料1

AO 入試合格内定者に対する入学前指導の内容。

児童教育学科 合格内定者のフォローアップ課題について

児童教育学科ではAO入試によって、進路を決定(内定)された皆さんに対し、大学入学までの日々、残された貴重な時間を有意義に過ごし、大学生活をスタートさせる意味を含めて以下の課題を出します。しっかり進めてください。

【課題内容】

大学生になるための思考力を育てるために

(1) 研究レポート作成

この目的は、大学らしく自分でテーマを決め、自分で読む本を探し、あなたらしいレポートを作り、「興味のあることを自ら学ぶ良さ」や「分かる楽しさ」を入学前に体験してもらうことです。この学びで、4月から始まる大学生活の魅力が見つかり、高校と違う学びに期待が大きくなると思います。これはAO入試で合格した人だけに許された特権・メリットです。

〈レポートの課題〉

あなたが入学しようとしている児童教育学科に関係する内容(広い意味での教育や学習・教科に関することでも構いません)から興味のあるテーマを選び、関連する書物数冊を読んでください。図書室などで自分で探してみましょ。また新聞記事やインターネットの記事も参考になります。必要なら司書の方にも相談してみましょ。大学の下記の教員へも相談できます。

本の探し方: これであなたが読みたい本かどうかがおおよそ分かります。良い本と出会えることを願っています。

1. 本の題を見る(普通は見ますね)
2. 著者紹介を見る(どんな人なのか分かる)
3. 目次を見る(話の展開、そしてキーワードが分かる)
4. 「まえがき」と「あとがき」を見る(著者の本に対する思いが分かる)

〈レポートの様式〉

あなたの選んだテーマを元に、別紙の項目に基づいてレポートを作成してください。

- ・手書きの場合はA4のレポート用紙を使用し、縦横の字数は適宜決めること。パソコンで作成する場合はA4のコピー用紙を用い、縦横ともに40字に設定する。きっと数ページになると思うが、ページを無理に埋めるのではなく自分の考えをしっかりと書くこと。大学ではこのようなことを要求する(本の図などは、コピーして貼り付けて構わない)。
- ・1行目に題名、2行目に氏名を書き、3行目から項目を書き1字空けて本文を始める。
- ・最後に、横2か所をホッチキスで留める。

〈レポート提出日〉

入学後に授業が始まってから、「入門ゼミ」の第1回目の授業時に、担任教員へ提出してください。

〈研究レポート作成の個人指導〉

何をしたらよいか困る人もいるでしょう。先ずレポート全体の組み立てを考えましょ。分かる範囲で別紙の「レポートの内容(設計図)」を書いて、それをもって大学に来てください。できる範囲で構いません。一人ひとりに研究レポートの考え方や作成の指導をします。大学での学びや、学ぶ喜びを知ってもらうためです。

資料2-1 構想の組み立て例①

研究レポートの“設計図”

受験番号(20206)(U) 高校 氏名(A. S.)

<①あなたが興味のある内容やテーマ>

- ★ 学びについて.
- ★ 今から学ぶこと.

<②①を選んだ理由・調べる目的>

教師を目指しているので、まず「学ぶ」ということについて、最初、知識としてあるべきこと、というところから、そして簡単に「教師」に「関係ないから、今の段階で学ぶべきことを知っておく」とより「教師になる視野」を広げたい。

<③あらすじ・項目>どのようなことを調べどんな順に書いていくのか(目次)を考える。

1. テーマ、その理由、自分の関わり(①②)

2. 本論 ↓
- ① 学びについて
 - ② 学びがなぜ必要か(環境等)が必要か
 - ③ それを学ぶには教師が何をやるべきか
 - ④ 今から、私が何を学ぶべきか。

3. 感想 ↓

4. 文献 → 5. まとめ

<④使いそうな本など>題名・著者名・出版社名・発行年

○ どうして勉強するの? お母さん 社/丸の内 2006/12

○ 教師の心ごと若者たち 大橋功 社/丸の内 2000/03

○ 学びがなぜ必要か(環境等) 人・空間・時間・情報・分析と学びのしくみ
 著/指定都府教育研究所連盟
 社/東洋館出版社 2000

資料2-2 構想の組み立て例②

研究レポートの“設計図”

受験番号(2021)(K)高校 氏名(R. U.)

<①あなたが興味のある内容やテーマ>

読書

<②①を選んだ理由・調べる目的>

小学生頃から読書が好きだったから。特に小学校3年生頃に読んだ本が影響している。

私が小学校の教員になった時に、子どもたちにどんな本を薦めたいと思うか。その本がどんな影響を与えるのか、知りたかったから。

<③あらすじ・項目>どのようなことを調べどんな順に書いていくのか(目次)を考える。

- 子どもから学ぶべきこと。" 道徳"。
- 何故考えに至ったか。" 影響を受けたから。"
- 実際にはコミュニケーション " 学級会方式"
- 感想、反省

<④使いそうな本など>題名・著者名・出版社名・発行年

教育関係 はやねあひる

青島文庫 講談社

資料3

研究レポートの書き方

初めての体験になる人もいるかもしれません。できることを考え、分からないことがあればメールで大学の津吹まで相談すること。レポートの初めに学科、受験番号、名前を必ず記入してください。

1. テーマ（題）：初めに決めて良いが、興味や関心に沿って進めていくうちに内容が変化することもある。全体が出来上がった時点でもう一度考えてみるのも良い。
2. 目次：初めに大まかな流れで骨組みを作り、内容が決まった時点で見直す。分かりやすく示すために、順序を変えたり内容を追加したりすることもある。ここを見るだけで、全体の内容や著者が何をどのように考えて主張しているのかが分かるように大事な部分である。
3. はじめに：このテーマにした理由、自分との関わりを示す。
4. 本論：言うまでもなくこれが中心である。この展開を考えるためにも、目次を大切にしたい。内容に関するあなたの考え（考察）もしっかり入れて主張しよう。
5. おわりに：この研究をして自分にとってどうだったのかを示す(自分での評価)。感想も含む。
6. 文献：研究のために使った資料（本）を示す。本は2冊以上使用のこと。レポートを読む人が、その資料を見て確認することができるように示す。(使った本・参考にした本、新聞記事、インターネット、資料他)
7. 内容のまとめ（レジメ）：ここだけ読んでも全体の内容が分かるように、あらすじを示す。

資料4

2014.4.17

アンケート：AO・推薦合格者の入学前指導のレポート課題について

学籍番号(14JB) 氏名()

次の内容について、思ったこと、感じたこと、考えたことを素直に教えてください。
皆さんの様子を知りたいので、協力してください。

書き終わったら、津吹まで提出してください。研究室は、8号館5階の8505の部屋の
ドアのポストに入れてください。

(1) あなたのレポートのテーマや内容を簡単に書いてください。

(2) あなたの今回のレポート作成を、自分で評価して○を付けてください。本音で正直に。

(a) レポートの取り組みに対して。(A B C D)

(b) 出来上がったレポートに対して。(A B C D)

(3) (2) でそのように評価した理由は？

(4) これまで、①テーマ、②内容、③組み立て、④本の選定、を含め、すべて自分で決める課題に、
あまり取り組んだことがなかったのではないかと思います。このような課題をどう思いますか。
思った通りに書いてください。